〈資　料〉

山田多賀市著作目録

村上林造

一、本目録は、『耕土』の作者として知られる山田多賀市（本名「多嘉市」、明治40・12・16～平成2・9・30）の著作のうち、編者が確認し得たものを発表年代順に配列したものである。
二、記載にあたり「小説」「評論・随想・その他」に分類したが、この区別は便宜的なものである。
三、雑誌新聞等に掲載された作品の題名は「　」で、単行本の書名は『　』で表した。
四、山田多賀市が手がけた雑誌は、「文化山梨」、「農業と文化」、「農政と技術」、「農民文学」等であるが、これらのうち、現在復刻されて全貌が明らかなものは「農民文学」だけで、それ以外のものはなお不明な点が多い。「文化山梨」については、編者が見ることのできたのは、山梨県立図書館と山梨県立文学館所蔵のバックナンバーだけである（本目録「備考10」参照）。また、「農業と文化」と「農政と技術」はさらに散逸が激しく、編者が目にし得たのは数冊にとどまる。
五、雑誌以外にも、本目録にはなお相当の遺漏があると思われる。大方のご教示をお願いしたい。

	小説	評論・随想・その他	備考
昭和10年（1935）	1月「**瓦職仁義**」（「郷土」創刊号）※1 2月「**狐**」（「郷土」一巻二号） 5月「**激浪**」（「郷土」一巻三号）※2	5月「**井戸の中の感想**」※3（「郷土」一巻三号）	1　「全山梨の同職三百人に捧ぐ」との献辞あり。 2　末尾に「一九三五年五月北巨摩郡登美村竜地杉浦瓦工場にて書く」との記載あり。 3　題名に「評論みたいなもの」との注記あり。 4　「山梨文化」は、山梨文化
昭和11年（1936）		6月「**文学の有難さ**」（「山梨文化」）※4	

昭和12年（1937）	3月「夕立雲」（「人民文庫」二巻四号）	
昭和14年（1939）	3月～昭和15年1月「耕土」一章～七章（「槐」二巻三号）／二章（「槐」二巻六号）／三章（「槐」二巻七号）／四章（「槐」二巻八号）／五章（「槐」二巻九号）／六章（「現代文学」創刊号　三巻一号）／七章（「現代文学」三巻二号）※5	8月「俺の師匠」（「槐」二巻七号）※6
昭和15年（1940）	3月『耕土』（大観堂）※7	
昭和16年（1942）	10月「生活の仁義」（「文芸復興」一巻九号）※8	
昭和22年（1947）	12月『耕土』（文化山梨社）※9	12月「全県を襲う水害をかえりみて」（「文化山梨」三二号）※10
昭和23年（1948）	5月「短編小説　歯車」（「文化山梨」三八号）	1月「全山梨の文化人及び読者諸君に送る」（「文化山梨」三四号） 4月「政治家と官僚への公開状―文化運動の立場から」（「文化山梨」三七号）

5　各章末記載の脱稿年月日は次の通り。一章（昭和ママ三年三月二三日）／二章（一九三八年四月九日）／三章（十三年七月脱稿十四年四月浄書）／四章（十三年七月作　十四年四月浄書）／五章（十三年七月作十四年五月浄書）／六章（十三年八月作・十四年五月浄書）／七章（十三年七月作、十四年五月浄書）

6　末尾に「十四年七月二七」との記載あり。

7　三七〇頁、作者の「後記」を付す。雑誌初出本文と比べると、字句の訂正のみならず大きな改稿が施されている。

8　「編集後記」に上野壮夫の賛辞あり。芥川賞候補となる。

9　三一〇頁、巻頭に岩上順一「『耕土』について」、巻末に作者の「三十代の決算」を付す。底本は大観堂版本文だが、校正不十分で誤植が目立つ。

10　「文化山梨」の創刊は昭和21年2月だが、創刊号～三一号、三三号、三五号、四六号五二号、五三号及び六四号以降の号は編者未見。終刊時期

連盟の機関紙。

7月「犠牲」（「作家」四号）

7月「青年諸君に」（「文化山梨」四〇号）
10月「社説　教育委員選挙　教育委員会の在り方」
「随想　文学者の一つの道」（「文化山梨」四三号）
11月「養豚の村を訪ねて」※11
「農業恐慌論」（「文化山梨」四四号）
12月「崩れゆく農地制度ー農業恐慌論前承」（「文化山梨」四五号）
12月頃農業技術雑誌「農業と文化」創刊※12

昭和24年（1949）

12月「短編小説　横領事件弁明の記」（「文化山梨」五四号）※14　※15

2月「グラビヤ身延山久遠寺」
「山梨県に於ける共産党と社会党」
「ルポルタージュ富士山麓を行く」（「文化山梨」四七号）
3月「総選挙をかへりみて」（「文化山梨」四八号）
4月「山梨県から登場した二人の大臣」（「文化山梨」四九号）
6月「御嶽三柱の護り神」※13（「文化山梨」五〇号）
7月「盆地に育つ耕土の科学者！」（「文化山梨」五一号）
12月「堆肥（つみごえ）の化学　肥料成分の分析と性質」※16（「文化山梨」五四号）

は不明。

11　署名「カタイチ」。おそらく「タカイチ」の誤植と判断してここに採った。

12　農村文化協会発行。編者未見。創刊時期を昭和23年12月とするのは、「文化山梨」五四号の編集後記による推定。

13　末尾に「昭和二十四年四月十二日」の記載あり。

14　「初めて書いた身辺小説」との但し書きあり。

15　この号より、編集後記が山田多賀市から保坂栄子に変わる。その編集後記に「文化山梨が、一九四八年（去年の一二月）子供を生んだ」、「子供も（月刊発行誌、農業と文化）山梨の母体をはなれて、日本の桧舞台で、立派な働をしてくれます」とある。

16　署名「海堂静馬」。『雑草』の記述により山田多賀市の筆名と判断し、ここに採った。

昭和25年（1950）	4月「短編小説　名士」（「文化山梨」五七号） 10月～昭和26年1月「続編　耕土」第一章～第四章※17（「文化山梨」六〇号～六三号）※18	2月「政治家と恋愛」（「文化山梨」五五号） 3月「今後の日本農民運動への感想―元農林大臣平野力三さんを想いだしながら―田中正則氏の御逝去を悼む」（「文化山梨」五六号） 4月「随筆　初夏の象」（「文化山梨」五七号） 7月「更新の記」（巻頭言）（「文化山梨」五八号） 11月「赤色革命か自由主義反革命か」（「文化山梨」六一号）	
昭和26年（1951）	9月～昭和27年2月「耕土」（続編）第一章～第六章（「農民文学」創刊号～六号）※19		
昭和27年（1952）		2月「短編小説について」（「無名作家」第三輯）※20 4月「人生何が面白い」（「農民文学」七号） 6月「農民は無知であるか」（「農民文学」八号） 8月「新たなる農民群像」第一話（「農民文学」九号）	
昭和29年（1954）	11月「腰抜け」（「文化人」十七号）		

17　第一章に「長編小説耕土（続編）発表にあたって」を付す。

18　「続編　耕土」第五章、六章は、おそらく「文化山梨」六四号、六五号に掲載されたと推定されるが、編者未見である。

19　第六章末に山田多賀市の「附記」を付す。

20　巻末に「一九四六年七月三〇日」の記載あり。また、本号には山田文雄（多賀市の弟）遺稿「死の記録」を掲載。

昭和30年（1955）		2月頃農業技術雑誌「**農政と技術**」創刊 ※21
昭和33年（1958）	2月「**春日遅々として―村に電話がある家の風景**」（「中央線」創刊号）※22 5月「**女運☆男運―狸伝六禁治産の巻**」（「中央線」第二号）※23 11月「**阿蘇山系**」**長編第1回**（第二次「中央線」創刊号）※24	11月〈**座談会**〉「**地方の文学を語る**」司会　山田多賀市　一瀬稔　※25（第二次「中央線」創刊号）
昭和36年（1961）	3月「**草角力**」（農民文学会編『**農民文学代表作集**』第一集　甲陽書房）※27	1月「**キチガイニッポン**」「**若さと知識**」「**高利貸退治を**」「**ゴテる町村合併**」「**豚と農民**」「**サンダル社長の国**」（随筆『**さんしょう魚**』※26 山梨時事新聞社編　甲陽書房）
昭和38年（1963）		6月「**本庄陸男回想**」（「位置」二号）※28
昭和39年（1964）	11月「**代償の女――奴婢の報復**」（「作家」一九一号）	8月「**石狩川の岸辺に立って**」※29（「アカハタ」8月23日）
昭和40年（1965）	2月～6月「**人間家畜―本朝奴婢物語**」**第1回～5回**（「作家」一九四号～一九八号）	8月「**おそい春**」（「作家」二〇〇号）

21　「農政と技術」第六号が昭和30年7月1日に発行されていることから逆算して、創刊を昭和30年2月と推定した。

22　巻末に「一九五七年三月三十一日」の記載あり。この「中央線」編集者は藤巻宣城氏。

23　巻末に「昭和三十三年三月十五日」の記載あり。

24　目次には「連載第一回」とあるが、この第二次「中央線」は創刊号しか発行されず、第二回以降が書かれたのかどうか不明。編集者は一瀬稔氏。

25　座談会の参加者は、佐藤森三、成島俊司、小林富司夫、萩原慶助の四氏。

26　山田多賀市略年譜を付す。

27　他に打木村治、鏑田研一、丸山義二、鶴田知也等の作品を収録。

28　山田昭夫「山田多賀市氏と本庄書簡」を併載。

29　「本庄陸男没後2周年」との見出しあり。

昭和41年(1966)		1月「地方作家の回想―本庄陸男と武田麟太郎」（「中部文学」二号）
昭和42年(1967)	12月～昭和43年11月「雑草」第1回～第11回（「作家」二二七号～二三八号）	
昭和44年(1969)		10月「熊王文学と河鹿川」（「作家」二四九号）
昭和45年(1970)	2月「押しかけ女房――ばか話・お伽草紙」（「作家」二五三号）	6月「文学と健康」（「作家」二五七号）
昭和46年(1971)	1月「役人かたぎ―支配者は今も昔も」（「中部文学」第五号） 2月『雑草』（東邦出版）※30 4月～5月「七〇年代」（前・後）（「作家」二六七号～二六八号） 8月～昭和47年11月「北富士物語」第1回～第10回（「作家」二七一号～二八六号）	10月「戦争を知らない若者へ」（「月刊ヤマナシ」二号）
昭和47年(1972)		4月「授賞の感想」※31（「全線」第12年6月号）
昭和48年(1973)	11月～49年6月「農民」第1回～第8回（「作家」二九八号～三〇五号）	

30　全二五二頁　巻末に作者の「あとがき」を付す。昭和47年全線文学賞受賞。

31　小寺正三の選評「一気に読ませる魅力的な自伝　山田多賀市著『雑草』」、及び「山田多賀市略歴」を併載。

昭和49年（1974）	6月『農民』（東邦出版）※32	
昭和50年（1975）		8月「器用と勤勉」（「中部文学」一〇号）
昭和51年（1976）	6月『耕土』（『土とふるさとの文学全集』第四巻　家の光協会）※33	1月「馬肉と大きな梅の味」（「中部文学」一一号） 7月「ジッと手を見る」（「中部文学」一二号）
昭和52年（1977）	5月～9月「続・雑草――幽霊この世に生きて」第1回～第5回（「作家」三四〇号～三四四号） 12月『実録小説北富士物語』※34（たいまつ新書29　たいまつ社）	1月「太いヒモ細いヒモ」（「中部文学」一三号） 11月「農民作家の日本列島改造（案）」（「作家」三四六号）
昭和53年（1978）		1月「長い青春――あづまのおねえちゃん」（「中部文学」一四号） 1月「過疎村の議員さん」※35（「作家」三四八号） 2月「鼻帯をかけた組合長」（「作家」三四九号） 3月「曲った道」（「作家」三五〇号） 4月「村のカギっ子たち」（「作家」三五一号）

32　全二一〇頁。巻末に作者の「あとがき」を付す。

33　『耕土』の他に長塚節『土』犬田卯『村に闘ふ』和田伝『沃土』を収める。巻末に南雲道雄氏の解説と略年譜を付す。『耕土』本文の底本は、昭和22年の文化山梨社版を用いている。

34　全二六九頁。巻末に北富士闘争略年譜と作者の「後記」、裏表紙に熊王徳平の「北富士物語」讃を付す。

35　1月「過疎村の議員さん」～5月「村の多額納税者」は、「消され行く農民」1～5の副題をもつ。

		5月「村の多額納税者」（「作家」三五二号）
昭和54年（1979）	8月「老人日記」（「作家」三六七号）	
昭和55年（1980）	6月～8月「カラオケ村風景」第一話～第三話（「作家」三七七号～三七九号）	4月「甲州選挙一〇〇％――老人日記の内」（「作家」三七五号）
昭和56年（1981）		3月「おらがの嫁」（「中部文学」一五号）
昭和57年（1982）	9月「小説・護られた天皇制」（「新山梨」創刊号）	3月「この川に水たえず」（「中部文学」一六号） 10月「ムカシの話いまの話①神風が吹くという話」（「新山梨」二号） 11月「ムカシの話いまの話②うつり変りゆく男女の位置」（「新山梨」三号） 12月「ムカシの話いまの話③福の神の戸籍しらべ」（「新山梨」四号）
昭和58年（1983）	5月～昭和59年2月「天平群盗伝」①～⑩（「新山梨」九号～一八号）	1月「ムカシの話いまの話④天皇制の確立と民衆」（「新山梨」五号） 2月「ムカシの話いまの話⑤ああ落陽、弱小民族」（「新山梨」六号） 3月「ムカシの話いまの話⑥小荒間の裸男と耶馬台国の女王」（「新山梨」七号）

	4月「ムカシの話いまの話最終回　娘の読んだ昔の話」（「新山梨」八号）		
昭和59年（1984）	4月「対談・山梨の文化を語る」※36（「新山梨」二〇号） 5月「ある農民作家の手記」（「新山梨」二一号）※37 8月「文学館構想批判によせて」（「新山梨」二四号） 10月「奇人・川柳作家清水狂亭」（「新山梨」二六号）		36　対談相手は清水昭三氏。 37　本号に、「『耕土』文学碑前で山田多賀市氏激励会開く」を併載。
昭和60年（1985）	12月翻案小説「平安庶民太平記――「今昔物語」巻二八話より」（「新山梨」二八号） 2月「まぼろしの花嫁」（「新山梨」三〇号）	8月「幻想を追って――ある三神弘論」（「新山梨」三六号）	
昭和61年（1986）	12月～昭和6年11月「ベッドタウンにサクランボの熟す丘」①～⑫（「新山梨」五二号～六三号）		
昭和62年（1987）	12月～昭和63年1月「押しかけ女房」前編・後編（「新山梨」六四号・六五号）	9月『終焉の記』（「山梨ふるさと文庫」）※38	38　全二〇五頁。巻末に備仲臣道氏の「山田先生とのこと」を付す。
昭和63年（1988）	2月～3月「奈良朝しぐれ」前・後（「新山梨」六六号・六七号） 5月「翻案万葉庶民伝①今昔物語巷説抜書控　都の美女と田舎の若ざむらい」（「新山梨」六九号）		

	6月「翻案万葉庶民伝②今昔物語巷説抜書控　竜肝姫」（「新山梨」七〇号） 12月「翻案万葉庶民伝⑤今昔物語巷説抜書控　大毘舎那仏」※39（「新山梨」七六号）		39　⑤は③の誤記と思われる。
平成1年（1989）	5月「翻案万葉庶民伝③今昔物語巷説抜書控　潮の流れ」※40（「新山梨」八一号） 6月～平成2年6月「天下の美食・日本の米のメシ物語」①～⑫（「新山梨」八二号～九四号）※41		40　③は④の誤記と思われる。 41　題名に「農民小説」との但し書きあり。 42　「本稿は山田先生の死後に、入院の前まで向かっていた机の上から発見された」云々という編集部の注記あり。
平成2年（1990）		12月「遺稿　私の死亡直前にあたり書き残しておきたいこと」※42（「新山梨」一〇〇号）※43	43　本号には、今川徳三氏「山田多賀市さんの形見となった万年筆」、原田重三氏「山田多賀市の哲学」を併載。

【付記】資料収集にあたっては、山田暉子氏、一瀬稔氏、備仲臣道氏、山梨県立文学館、山梨県立図書館、甲府市立図書館、名古屋市立図書館のご協力を得ることができた。厚くお礼を申し上げる。